

# 想像と秩序

## —ライプニッツの想像力の理論に向けての試論—

池田 真治

「想像的に可能なものは、現実的なものと同じくらい秩序の基礎 [すなわち時間と空間] に参与する」<sup>1</sup>

「最も抽象的な思惟すら、想像力の助けを要する」<sup>2</sup>

### 序

哲学の伝統において、知性と感性に関わる想像力の位置づけは常に両義的であった。合理論は、「誤謬と虚偽の女主人」にして真理の探究を妨げる経験的想像力に否定的側面を見る一方、数学的实践を主導し諸学の構築に不可欠な幾何学的想像力に肯定的側面を見た。とりわけ近代科学革命に象徴される17世紀は、想像力が哲学の主題となった時代でもある。というのも、その革命は認識観の変革をもたまたもたらさないわけにはいかなかったからである。科学革命に直面した哲学者たち—その多くがその担い手でもあったわけだが—は、多義的な想像力をどう位置づけるべきか、古典的認識枠組みの再検討を迫られた。学知が想像力に依存するならば、その基礎づけは想像力の理解如何にかかってくるからである。こうして近代初頭に、各々に独自の想像力理解を含む、豊かな哲学思想が形成された。

科学革命の渦中にあったライプニッツにおいても、その哲学の独自性は想像力の理解に顕著に現れている。そこで本論では、数学と哲学が交差するライプニッツの想像力<sup>3</sup>の理論について概略を試みる。しかし、その体系的な位置づけは未だ明らかではない。その理由は、ライプニッツにマルブランシュのような想像力に関して主題的に扱った著作が存在しないというだけではない。同時期ですら想像力の評価が一定しておらず、想像力の整合的理論の保有に不安がある。たとえば『人間知性新論』では、「図形の認識も数の認識も想像力には依存しない」と述べているのに対し、ゾフィー・シャルロツテ宛書簡では、「想像力に服する明晰判明な観念は、数学的諸学の対象である」と、数学と想像力の緊密な結び付きを主張している (A VI, 6, 262; GP VI, 501; cf. McRae[1995], p. 184)。そして、古今の様々な理論を吸収し、複雑になる一方の彼の哲学体系は、事態の解明を一層困難にしている。

そこで、方針としては、多義的な想像力の概念を著作ごとに位置づけつつ、論点と不動点を丹念に見極めていくことになる。本論は、そのための下準備であり、ライプニッツの包括的な想像力の理論の建設へ向けての、あくまで予備的な考察にすぎない。

本論は以下の順序で進行する。まず、ライプニッツの数学思想における想像力の位置づけを確認する(1)。そこでは、普遍数学に「想像力の論理学」という独自の規定を与えていることが注目される。数学と想像力の関係に関するライプニッツの独自性は、人間的認識の発展の方向を「盲目的思惟」、すなわち経験的想像力と区別される記号的想像力の練成に見出し、それを徹底したことにある。次に、哲学における想像力の位置づけを問題にする(2)。そこでは、想像力をライプニッツの枠組みで考えた場合、果たして「想像力の論理学」は可能かが問題にされる。ライプニッツもまた想像力を多義的に捉えるが、表象／概念の枠組みによってそれを再定義する(3)。こうして、普遍数学の行く末を見定めるには、表象／概念、心像／観念のあいだを結びつける想像力の理論の解明が不可欠である。しかし、そもそもライプニッツに「想像力の理論」はあるのかが問われよう。素朴には、予定調和の体系が想像力という媒体を不要にするよう思われるからである。そこで、この統合的機能が持つ異なる様相とカテゴリーがどのように対応しているかを問題にする(4)。すなわち、認識の種類、および、可能／現実、表象／概念という分類における想像力の位置づけを探る。最後に結論として、想像力を秩序づけるというライプニッツの普遍数学思想が、秩序づけられうる想像力という理解を含むその哲学と表裏一体であることを主張する。すなわち、虚構的对象をも積極的に受け容れることを彼に可能にしているのは、想像力を盲目的に記号を結びつけるはたらきに見て、演算や規則に従うように想像力を記号的思惟としてのそれに徹底し、想像力を秩序づけることで新しい領域を切り開くことを可能にする、彼の普遍数学観にある。そして、そうした想像力の秩序を可能にしているのは、異なる記号体系間の構造的類比を認める彼の「表現」の理論、および、概念と表象という異なる類のあいだを媒介する秩序づけられた想像力を説明する「調和」の思想である。

## 1. ライプニッツの普遍数学における想像力の問題

ライプニッツの普遍数学思想では想像力がしばしば強調される。その概念がもっとも前面に現れるのは、「普遍数学の新原理」(*Elementa nova matheseos universalis* [1681-83?])である。

普遍数学 (Mathesis Universalis) は、想像力の射程に入るものが何かを厳密に確定する方法 (Methodus) —すなわち、言わば、想像力の論理学 (Logica imaginationis) —を伝えねばならない。

したがって、ここでは、純粋に叡知的な事物・思想・作用といったものに関する形而上学は除外される。また、数・位置・運動に関する特殊な数学も除外される。(A VI, 4, 513)

ここでは、ライプニッツは普遍数学を「想像力の論理学」と捉えている。「想像力」で理解されているのは、数学的対象の領域を想像力の射程によって規定することである<sup>4</sup>。また、「論理学」で理解されているのは、特殊には代数や幾何学、一般には諸学の基礎として結合法という諸項のあらゆる可能な結合を明らかにする論理的方法をモデルに、分析や総合を含む広い意味での推論によって学知を形成する方法である (*ibid.*)。ライプニッツは、ヴィエトやデカルトらの記号代数学より一般的な記号法を構想し、その方法によって数学の適用領域を拡大する。その拡大は、想像力の射程にも反映されている。

想像力の射程には、量 (大きさ) だけでなく質 (形) も含まれる。また等/不等の関係だけでなく相似/非相似の関係も含まれる (A VI, 4, 514)。数学的対象領域の拡大には、彼自身の数学的發展が対応している<sup>5</sup>。量の側面に関するライプニッツの独自性は、彼の方程式論や無限小解析に示されているように、虚量や超越量をも数学的対象として積極的に認めたことにある。質の側面に関する独自性は、エウクレイデスの『原論』や『与件について』の幾何学に忠実な真の幾何学的計算として、相似や合同などの定性的側面をも図形に頼らない純粋な記号計算に還元する幾何学的記号法の探究に見られる。それは、既存の代数によっては幾何学の定量的側面のみしか扱えず、幾何学と本性を異にする定性的側面は翻訳できないという限界を踏まえたものだ。普遍数学を純粋知性ではなく想像力を主軸に規定すること、および、計算の理念を量から質へと拡大し関係の一般的理論を構築することに、デカルト派らの普遍数学と区別したいライプニッツの新しい普遍数学の強調点がある。

つまり、「想像力の論理学」とは、その形式的基礎を一般論理学あるいは結合法 (記号法) に有して想像力を秩序づける一般的方法である。その分枝をなす「位置解析」は、「想像力の補完と完成」を目指す方法である (*De analysi situs* [1693?], GM V, 183)。このことでライ

プニッツは想像力の図形的推論への貢献を軽視したわけではない (CG, p. 146-9)。しかし、幾何学的記号法に見るように、学的認識の開発可能性を想像力の記号的はたらきにより多く観察する。人間認識の本性は、直観よりも記号的 (盲目的) 思惟にある。延長との結びつきから解放されることで、想像力が新しい数学的概念の源となることに、ライプニッツは数学の発展の一つの可能性を見たのである。

ライプニッツの理想は、想像力にまったく依存しない普遍的計算を作ることにあつた。しかし、普遍数学の計画において、想像力への依存を不可欠とする人間認識が、いかにして「想像力に基づきつつ想像力を越える」ことができるかという問題に直面する (cf. Belaval[1960], p. 180)。こうして、想像力の問題に対するライプニッツの戦略は、想像力をその記号的はたらきに集中し、「想像力の形式化」 (*ibid.*, p. 194) を推し進めることとなる。

このとき、「想像力の形式化」によって、(i) 想像力の無用性が示されはしないか、あるいは、(ii) 数学において想像力はその感覚的依存を記号に制限された最低限の役割をしか与えられていないのではないかが問われよう。(i) に関しては、たとえ形式化されても、想像力は理解にとって不可欠だとライプニッツは答えるだろう。人間の思惟はたとえどんなに抽象的でも想像力と不可分である (冒頭引用)。少なくとも感覚的痕跡である記号にわれわれの思惟は依存するからである。そして、この考えはアリストテレスやスコラの伝統とも両立する。(ii) に関しては、数学の発展にア・ポステリオリに示されているように、記号的想像力への徹底は、むしろ想像力の制御とそのはたらきの自由な領域への解放を両立させる、と答えるだろう。ライプニッツは、想像力の数学への貢献を、単に記号化による記憶力の負担を軽減する実践的方向に見出したのではなく、記号結合によって得られる表現の多様性という生産的方向にも見出す。記号的想像力は、潜在的レベルに留まっていまだ見えないものを、記号化によって見えるようにする力である。それは、肉眼の像や「精神の眼」に映る心像という経験的想像力の領分を越えて、対象の可能的存在を概念させる。

たとえば、完全な図形は外的に存在しないだけでなく、心像としても現れえない。しかし (デカルト座標系で)  $x^2+y^2=r^2$  により完全な円の観念を表現できる。また虚量 (*imaginaria*) は、「形の上で不可能な *in species impossibiles* 量」、つまりその作図ができず自然の内に (*in natura*) 確立されない<sup>6</sup>。しかし虚量は、 $3=4$  のように矛盾を含まず、「偶然によって不可能な *impossibiles per accidens* 量」である (A VI, 4, 520-1)。すなわち、 $\sqrt{6} = \sqrt{1+\sqrt{-3}} + \sqrt{1-\sqrt{-3}}$  のように、方程式の右辺に虚量が介入し「形の上では虚 *imaginaria in specie*」だが、実量に

還元される場合、その方程式を正当な表現として認めてよい (GM VII, 141f.)。認識論的にも、虚量や無限小は虚構だが、「精神による抽象」に基づいており「良く基礎づけられた虚構」である (A VI, 6, 57)。解析的想像力は、正無限多角形としての円や接線の決定に見られるように、曲線の軌跡を無限小線分の連鎖と見立てる。それは計算にとって致命的にならない比較不可能なほど小さい誤差を 0 と同一視する。デカルトが形而上学的理由および数学的・技術的理由によって幾何学から排除した超越曲線も、ライプニッツでは無限級数で表現されうる幾何学的対象である<sup>7</sup>。代数化するなわち図形の〈形〉を記号において捉えることで、式の〈形〉からこれまで異なる事物にしか見えなかった図形のあいだに隠された同一性を見えるようにし、一般的構造を抽出する。実際、円錐曲線の一般方程式は、楕円や円・双曲線・放物線という特殊な二次曲線をも記号的に表現する。ライプニッツはそのことを「調和への還元」とも呼ぶ(「普遍性の方法」*La méthode de l'universalité* [1674?], C. 98)。

## 2. ライプニッツの哲学における想像力の問題

次に、哲学的観点から普遍数学の構想を眺めてみよう。このとき、「想像力の論理学」はそもそも可能なかが問題になる。また、その規定は、数学と論理学・想像力の関係を問う<sup>8</sup>。数学が可想的对象を扱うという規定自体は伝統の踏襲にすぎない。明らかのように、ライプニッツの独自性は数学を論理学と結びつけた点にある<sup>9</sup>。このために、ライプニッツの論理学は、論理主義や論理実証主義の文脈で語られてきた。実際、ライプニッツは知覚の心理的構成ではなく概念の論理的な分析と総合によって普遍数学を立ち上げた。それは、ある認識プロセスの論理学化ではなく、可想的概念一般の論理的構成を目指す。ここにライプニッツからフレーゲ、そしてカルナップへとつらなる、意味の合理性に関する「客観主義」的伝統がある<sup>10</sup>。しかし想像力の問題と比較したとき、はたして、「想像力の論理学」は数学的概念や命題のア・プリオリな構成の学なのか、それとも、純粋論理学に還元不可能な想像力に何か固有の原理がその学に決定的に関わっているのか、改めて問われよう。

ライプニッツは意味論的伝統の起源にあっても、概念を結びつける何らかの能力が諸学の認識源泉として不可欠に関わると考える。すでに数学において想像力の使用は多義的で、概念のア・プリオリな構成には必ずしも従わない。実際、代数や解析では、ライプニッツは問題の解決可能性、すなわち発見の観点を第一に優先した (cf. Knobloch[2006])。また、概念の構成の方針のみで普遍数学を可能と見るのは、ライプニッツの哲学に普遍数学の計

画を反省した場合難しい。というのも、以下に見るように、想像力は「知覚」—ライプニッツの用語では「表象 perception」—と「概念 concept」の双方に関わる能力だからである。

### 2-1. ライプニッツの想像力の概念

まず、「想像力」の位置づけをゾフィー・シャルロッテ宛書簡[1702]に見てみよう<sup>11</sup>。ここでは、「想像力」とは、その場所を魂の内に持ち、異なる外的感覚の表象を一つに結びつけて (réunir) 魂の内に表象する内的感覚 (sens interne) であり、個別感覚がもたらす明晰だが混雑な概念と共通感覚がもたらす明晰かつ判明な概念とを同時に把握する精神のはたらきである (GP VI, 501)。第一に、感覚・共通感覚<sup>12</sup>・知性という人間の認識機能の伝統的種差がライプニッツにおいても踏襲されている。それら種差に応じて、(1) 個別感覚が与る単に可感的な対象、(2) 共通感覚に属す可感的かつ叡知的な対象、そして(3) 純粹知性にのみ属す叡知的な対象がある。想像力は共通感覚と同一視される<sup>13</sup>。想像力の両義性の問題がここに引き継がれる。第二に、種の異なる認識が概念の判明性に関する程度差によって類別されている。個別感覚がもたらす明晰だが混雑な概念の例としては色や香り、共通感覚がもたらす明晰かつ判明な概念としては数や形がある。そして純粹知性にのみ到達可能な概念としては、自我や存在など実体に基づく直観的・反省的概念、および力の法則や神など、想像力の管轄にある科学では説明できない究極的な原因や理由が考えられている。

### 2-2. 想像力の射程

次に、可想性の範囲を基礎文献で補っておく。『認識、真理、観念についての省察』[1684 夏-11 月]では、認識は順に、曖昧／明晰、混雑／判明、不十全／十全、記号的 (=盲目的)／直観的 (=完全) に分類されていた (A VI, 4, 585f.)<sup>14</sup>。それに従えば、想像力の範囲は (判明だが不十全な原始概念を除き) 明晰から記号的までのすべての概念である。数学の諸定理は定義や公理まで判明に分析されるので、その限りで記号的認識も名目的な十全性を持つ<sup>15</sup>。可想的概念には感性的なものから叡知的なものへの諸段階があるが、経験的想像力はより感性的な側に、記号的想像力はより叡知的な側に含まれよう<sup>16</sup>。叡知的かつ可想的概念とは、その概念が、自然に関する感覚的概念からの単なる抽象によっては得られないものである。感覚的概念からの抽象は、判明でない混雑な部分がどうしても残る (A VI, 6, 81)。対して、知性の内にある生得的な概念は判明である。想像力を用いて獲得可能な、

記号と観念のあいだに対応があるそうした判明な概念が、叡知的かつ可想的な概念である。しかし、それは知性のはたらきに依存することで、純粋な想像力の領分を越えてもいる。

シャルロッテ宛書簡では、想像力の評価は消極的で、知性が想像力や感覚を補佐するの  
でなければ論証的・普遍的な真理を得られないという形で、先に見た「知性に固有な対象」  
の存在が強調される (GP VI, 501)。こうして、想像力の限界が手紙の最後で述べられる<sup>17</sup>。

### 3. 表象と概念—ライプニッツにおける想像力の両義性の問題—

想像力の伝統的問題は、感覚器官と精神の媒体として想像力が想定されていることに存する<sup>18</sup>。前節で見たように、ライプニッツはこの伝統的枠組みを引き継いだ、それを認識の類で再定義した。つまり、想像力は一方で感性と知性の間に立って表象を統一する機能としてあり、他方で混雑と判明の双方に関わる概念を結合する形成と想起の能力である。そこで新たに浮上するのが、想像力における表象と概念の両義性の問題である。

『人間知性新論』において、ライプニッツはデカルト的伝統を引き継いで、心像と観念の混同を拒否し、両者の種差を認めた。例えば、図形についての単なる混雑した心像とその判明な観念 (A VI, 6, 261-263)。999 角形と 1000 角形は、よほど注意力を持った繊細な想像力でなければその形の上での識別は不可能である。対して、知性はそれらを容易に識別する。

ところが、同じ著作の中で、想像力は程度差に基づく連続的な認識モデルに組み込まれている。というのも、「混雑した観念つまり心像、あるいは [...] 印象」(A VI, 6, 487) と認めることで、心像もまた観念の判明性の度合いの中にその位置を持つからである。

問題は、思惟と表象の対応関係にある。これはカントの批判をどう捉えるかという問題でもある。それは、「ライプニッツは現象を知性化した」(KrV, A 271 / B 327)、すなわち、合理性のために感覚的表象と抽象的思惟のあいだの種差を認めず、論理的関係あるいは認識の判明性の程度においてしか感覚界と叡知界を区別しなかった、という批判だった。

これに関してはすでに多数の研究者が説得的に論じているので、要点だけ述べると、ライプニッツにおいて感覚的概念と感覚的表象が厳密に区別されねばならない (cf. Parkinson[1982])。つまり、ライプニッツは表象の明晰／混雑と概念の明晰／混雑とを区別している。例えば、青色の判明な観念も黄色の判明な観念も持っていなくとも、緑色をはっきりと認識できる (A VI, 6, 405)。何かに気付く意味での感覚はある判明な表象だが、そ

れ自体として思惟された場合は混雑な概念である。なぜなら、その混雑さはわれわれ表象主体の感覚の欠如によらず、微小表象を含む現象の本性だからだ (cf. De Buzon[1991], p. 537)。よって、カントの批判は、問題の核心部分を付いてはいるが、妥当ではない。

この議論は、想像力にも類比的に当てはまる。すなわち、可想的概念と想像的表象は存在論的カテゴリーを異にする。実際、幾つかの遺稿でも、想像力は表象あるいは思惟の観点から定義され両義的である。たとえば「変状について」(*De affectibus* [1679.4.20-22]) では、想像力は、表象の観点では、心のある変状 (*affectio mentis*) であり、あらゆる表象と同じく、現実的存在 (*existens*) に関わるとされる。他方で、概念の観点では、想像力は事象の可能性すなわち存在 (*ens*) と関わる (A VI, 4, 1434)。

「定義: 存在、可能的存在、現実的存在」(*Definitiones : Ens, Possibile, Existens* [1687 夏-1696 末]) でも、ライプニッツは存在の類を思惟されるものによって、現実的存在の類を表象されるものによって再定義する。すなわち、「存在とは判明に思惟可能なものである」、「現実的存在とは判明に表象可能なものである」(A VI, 4, 869)。そして、思惟と表象が様相の観点から一元論的に定義される。そこでは、存在 (*ens*) は可能的項 [項は概念と考えるよい]、現実的存在 (*existens*) は共可能的 (*compossibile*) 存在で定義される。可能的とは矛盾を含まないこと、共可能的とは、「他の存在と一緒になったときに矛盾を含まない」ことである (A VI, 4, 867)。こうして、共可能性の概念の発見が、ライプニッツに現実存在／可能的存在および表象／概念の二元論の問題を同時に克服させたかに見える。ここでは思惟と概念は同義だから、概念は可能的存在、表象は共可能的存在と考えてよい。数学的存在も平行的に定義される。たとえば位置 (*positio*) は存在の秩序、場所 (*locus*) は共存在の秩序、など (A VI, 4, 868)。テキスト後半では、相似などの質や関係が思惟、量や位置が表象で再定義される (A VI, 4, 870)。決定的なのは、ライプニッツが「外界からの区別はすべて内的な区別によって基礎づけられ、したがってまた表象可能なものにおけるあらゆる区別は思惟可能なものにおける区別に基礎づけられる」と主張していることである (A VI, 4, 870)。それは、表象の秩序 (世界) は概念の秩序 (カテゴリー) にそのアプリアリな基礎を有するという概念主義の表明である。想像力の両義性の問題に対する一つの回答がここにある。

しかし、そのことで本当に認識的な類差が共可能性の概念を介して論理形而上的な程度差へと還元されうるのかが示されているわけではない<sup>19</sup>。ライプニッツはそのアイデアを示したにすぎない。また反対に、ライプニッツが観念を精神の恒常的な変状であるとしてい



ることから、非概念主義的な唯心論をライプニッツに認める解釈もある (Jolley[1990], p. 138f.)。こうして、競合する新たな着想により、ライプニッツは自らの哲学の根本問題に直面している。すなわち、表象と概念という互いに異質ながら想像力が関わるという点では同類な関係をいかにして調和させるのか、それらの対応を説明する問題である。

#### 4. 想像と秩序

ライプニッツにおいて、概念と表象の対応を与えるのは「予定調和」の体系である。その説によれば、「宇宙の各実体の内に予め設定された相互関係が、実体相互の交渉と言われ  
るものを産出し、他ならぬ魂と身体<sup>・</sup>の結合をもたらす」(『新説』第14節, GP IV, 484f.)。とすれば、身体と魂を結合する媒体としての想像力の理論は無用になりはしないか。というのも、「想像力」でくられる諸現象は、予定調和の現われにすぎないこととなり、表象と概念の結びつきを説明する想像力のはたらきは、そもそも問題にならなくなるように思われるからである。

それでも、ライプニッツの調和の体系は想像力を排除しない。そこでは、一方で身体がなければ魂は何も表現できず、他方で魂がなければ身体を含む諸表象は判明性を持ちえないという、心身間の不可分な秩序的関係が要請される<sup>20</sup>。つまり、魂は常に自らの身体を表出しており、その身体は周囲の作用を被るため、魂は決して感覚の補助を奪われない (A VI, 6, 117)。われわれの抽象的思惟がすべて何らかの感覚的印象を必要とするのは、自然そのものの現われであり、心身間の予定調和が成り立つ条件でもある (A VI, 6, 77)。こうして、「最も抽象的な思惟すら、想像力の助けを要する」(冒頭引用)。ライプニッツの秩序の哲学が、想像力の場所としての身体を、単なる経験の機会にとどまらず、不可欠の要素としている<sup>21</sup>。

また、ライプニッツの「表出」の理論から、人間の想像力も自然的な仕方<sup>・</sup>で秩序に従うことが帰結する<sup>22</sup>。なぜなら、宇宙が完全に規則づけられているならば、それを表現している魂の諸表象の内にもある秩序がなければならぬからだ (『モナドロロジー』第63節)。そして、秩序に反しない限りで、知性の補助により想像力を叡知的真理に向けさせることもできる。すなわち、想像力は秩序を享受するだけでなく、それに参与もする。想像力は、受動的には、感覚と同様ある現象を魂の内に表現するが、能動的には、潜在的概念を不完全だが判明な意識的表象 (apperception) へと現実化させる。実際ライプニッツは、「想像的に可能なもの [つまり数学的対象] は、現実的なものと同じくらい秩序の基礎 [すなわ

ち時間と空間]に参与する」と考える(冒頭引用)。想像力は事物の形而上学的原理を与えないが、現実的存在と同様の機械論的規則に従う。数学的存在は、実体あるいはその変状から抽象された不完全な虚構だが、「一様に規則的な連続性は、たとえ仮定ないし抽象に由来するとしても、永遠真理や必然的諸学の基礎をなす」(GP VII, 564)と述べられるように、諸科学の真理基盤となる。概念としては分離している場所と時間を統一するのは、われわれの表象である(GP VII, 564)。その統一的秩序の典型として、われわれは物質を連続体として想像するが、その物体の一性は見かけの連続(continuum apparens)しか持たない疑似実体(quasi-substantiae)にすぎず(GP II, 257)、その一性が心的である点で虹などの現象と同類の虚構にすぎない(A VI, 6, 146)。ただし現象は、その一性の基礎を単純実体(モナド)からの抽象に持ち、整合的である限りで、「良く基礎づけられた虚構」である。想像力は、「思惟に秩序と結合を教える術」(A VI, 6, 342f.)としての「真の論理学」すなわち「構造的な類比」(構造レベルの類似性)を手掛かりに異なる記号的体系間に秩序的連関を見出す発見法を支えるアナロジーの能力でもある<sup>23</sup>。こうして想像力は、人間の本性的能力として完全な知識を目指すための橋頭保となる。

「自然の内ではすべてが秩序にしたがって起こる」が、そうした秩序の認識は想像力を越えている(A VI, 6, 72f; 113)。したがって、秩序の認識を欲するならば、想像力に依存しつつ想像力を越えねばならない。われわれはそのような「実在への要求 *prétendre à existence*」、すなわちその実現を期待して混雑な表象から完全な実在へと至ろうとする傾向を本性的に持つ(『モナドロジー』第54節)。しかし、その実現は、想像力を介してのみなされるものである。

## 結

本論がなした分析に限れば、ライプニッツにおける表象の連続的モデルと概念のカテゴリカルなモデルは、少なくともわれわれ人間の想像力が関わる限り、いずれか一方が他方に還元されえない相補的なものである。表象のうちには、概念化可能な部分もあろう。とすれば、それは何か非概念的な前-概念と呼ばれるものを形成していよう。こうしてライプニッツにおいても、概念形成の理論を問う余地がある。概念のうちには、単なる可能性にとどまらず、そのうちに顕在化可能なものもある。あらゆる概念がそれに基づく諸観念は、現実態への態勢を持つからである。「共可能性」の概念によってライプニッツが模索し、

空間や時間の秩序を規定したのがこちらの局面であった。すなわち、想像力の秩序に関する反省において、ライプニッツの形而上学は彼の学的理念である普遍数学と深く結びついている<sup>24</sup>。

## 注

<sup>1</sup> *An die Churfürstin Sophie* [1705.10.31, Hanover], GP VII, 564.

<sup>2</sup> *Reponse aux reflexions contenues dans la seconde Edition du Dictionnaire Critique de M. Bayle, article Rorarius, sur le systeme de l'Harmonie preétablie* [1702, 1716 出版], GP IV, 563.

<sup>3</sup> ライプニッツ研究において、*imagination* (*imaginatio*) は「想像力」と共に「形象的思惟」ないし「形象作用」という訳語がしばしばあてがわれてきた(河野与一、米山優、工作舎著作集)。一方で、ライプニッツは感覚像と結びつく経験的想像力の意味で *phantasia* あるいは *phantaisie* をしばしば用いる (GP. VII, 320 ; A. VI, 6, 404)。他方で、ライプニッツにとって、*imaginatio* は一般に、精神のあらゆるはたらきを意味する思惟 (*cogitatio*) の下位概念であると同時に、知覚(意識的表象)や記憶とならび表象 (*perceptio*) の下位概念でもある。*imaginatio* は、その用語から連想して図形などのいわゆる像 (*imago*) にそのはたらきを限ってはならず、記号的思惟を含めた、より広義の概念である。その意味で、図形も記号も含みうる「形象的思惟」という訳語は、かなり適切なものであると考える。しかし、本論では中立的で一貫した用語を用いる便宜から、「想像力」と訳すことにする。第一に、テキストや文脈に応じてその概念が一貫しているわけではないことがある。第二に、本論で考察するように、想像力が「形象的思惟」に留まらず、虚数など、(記号としてのそれを除けば) 一般に形象を持たないとされるものについてまで仮想ないし仮構する力、対応する観念を持たない諸概念を結合によって虚構する力をも含むと考えられるからである。第三に、後期の形而上学や認識論では、物体は、寄せ集めにすぎず、その一性は表象に由来し、思惟的存在というより想像力の存在であり、現象である (GP VI, 586) とも述べているように、想像力は、表象や現象など、より広義の概念に吸収されて陰に隠れてしまい、厳密な位置づけが見えにくいことがある。いずれにせよ、現代における「想像力」の概念もまた、本論で扱った特徴すべてを含みうる極めて広範な使用を持ち、ライプニッツの *imaginatio* 概念を十分に受け容れうるものである以上、その使用に不都合はないと考える。

<sup>4</sup> 同時期の草稿、「一般学における結合術の使用について」(*De artis combinatoriae usu in scientia generali* [1683 夏(?)]) でも、「論理学とは一般的な学である。数学とは可想的事象の学である *Mathesis est Scientia rerum imaginabilium*。形而上学とは叡知的事象の学である」とされる (A VI,4,511 ; 強調原文)。

<sup>5</sup> ライプニッツの普遍数学思想を歴史的展開に沿って詳細に論じた研究書として、林知宏[2001]を参照せよ。

<sup>6</sup> 虚数をこの意味で「不可能な量」として捉えるのは当時一般的だった。その規定は、「想像的な数」の存在を積極的に認め、虚量を複素平面に可視化したオイラーに至っても踏襲されている。

<sup>7</sup> デカルトは『幾何学』[1637]において、代数方程式で表しえない曲線を機械的線とし、幾何学的線から区別する。ただしそれはデカルトが超越曲線を扱う数学を欠いていたということの意味しない (Vuillemin [1960])。実際、デカルトはサイクロイド問題において無限小を操るし、また対数曲線に関するド・ボアヌ問題(接点によって曲線を決定する問題)で無限小の方法に着手している。しかし彼の形而上学が無限小の数学的考察の障害となる (*ibid.*, p.73)。デカルトは、直線と曲線の間の比は人間によっては決定不可能であり知られない、としてド・ボアヌ問題の解が与えられることを認識論的に拒否する。こうしてデカルトは幾何学から無限を排除する。その幾何学の対象は一次元の「直線」のみであるが、厳密にはその線は「有限線分」である(佐々木力[2003], 272-7 頁)。幾何学に関するデカルトの方法は、無限小を用いた手続きを含まず、無限級数を含む方程式など、あらかじめそうした方法に依存しなければ解けない問題を幾何学から排除している。デカルトにとって無限小の方法は技術的理由から厳密なものではなく、したがって厳密性を前提する幾何学には含められなかった。対して、ライプニッツはその逆接線問題を無限小計算によって1676年までに解決する (Belaval[1960], p. 307-312)。ライプニッツにとっては非代数的曲線も厳密な連続運動として描かれる幾何学的対象である (Knobloch[2006])。ライプニッツはデカルトにとっての機械的曲線をも、自身の解析的計算の対象とする (GM V, 394)。したがって、デカルトと比較して、ライプニッツはさらに幾何学の領域を広げたとすることができる。デカルトがその方法によって有限代数解析を

基礎づけたのに対し、ライプニッツは微分積分により無限小代数解析を開拓したのである。

<sup>8</sup> Rabouin[2005]はこの問題に概観を与えている。より包括的な分析は、Rabouin[2009]の続巻でなされよう。

<sup>9</sup> 普遍数学を「想像力の論理学」と明確に規定するのは、筆者が知る限り、ライプニッツのオリジナルである。三木清の『構想力の論理』(岩波書店、1936/1946)の表題はバウムガルテンに由来する(三木清全集8巻、13頁; cf. A.G. Baumgarten[1779], *Metaphysica*, (ed. VII), 3,1,4,558)。「普遍数学の新原理」の一部は、クーチュラによって1903年に初めて出版され(C, 348-351)、ライプニッツとヴォルフ、およびカント的伝統との間にその概念をめぐる直接的な関係があったかは今のところ明らかでない。数学と想像力の問題の起源は、数学が感覚的質料から精神が叡知的質料を取り出す精神の抽象のはたらきに関わり、したがって抽象の対象の場としての共通感覚とそこでの対象を扱う魂のはたらきすなわちパンタシアーと関わるとする、アリストテレスの考えにある。数学的想像力への本格的な注目は、新プラトン派のプロクロスに遡れる(cf. Rabouin [2009])。ライプニッツも、想像力への依存をアリストテレス的パンタシアーに、想像力の限界をプラトンのミメシスとイデアの関係に見ている面があり、『人間知性新論』において「生得観念説」を介してそれらを融合している。より近い所ではスコラの背景がある。トマスによれば、数学は「感覚の射程内にあり、想像力 *imaginatio* によって捉えられる対象を扱う」(村上[2004], 72頁より再引用)。直近では、ライプニッツは「想像力を秩序づける」というモチーフを、デカルトやスピノザから継承している。デカルトの想像力理論については、村上[2009]が綿密なテキスト読解に基づいて論じており参考になる。

<sup>10</sup> 「客観主義」とは、意味は記号と事物との関係に基づいてのみ捉えられ、想像力をはじめとする人間の理解のはたらきは意味と合理性の本性をなさないとする考え方(ジョンソン[1991]「序」と解説433頁参照)。

<sup>11</sup> « Lettre touchant ce qui est independant des Sens et de la Matiere »[1702 日付不詳], GP VI, 499-508.

<sup>12</sup> 「共通感覚 *sens commun, sensus communis*」に関しては De Buzon[1991]を参照せよ。そこでは、感覚的表象と感覚的概念が区別された議論(Parkinson[1982])と類比的に、共通感覚と共通概念の区別が論じられる。

<sup>13</sup> ライプニッツは想像力を共通感覚と同一視するが、このことは通様相性 (*intermodality*) の観点から導かれる。(1) 触覚における図形と視覚における図形がある。(2) ゆえに異なる感覚の所与のあいだに共通のものがある。(3) 異なる感覚のあいだで共通のものとしてあるもの(通様相性)は想像力に属する。(4) 感覚が明晰判明の認知レベルに至るのは、何か共通のものが認知されているレベルにおいてである。

<sup>14</sup> ライプニッツの分類はスピノザの認識の類に手を加えたもの。ただし、スピノザでは想像力は物体に関わる限り不十全かつ混雑な認識で、記号的想像力の位置づけが両者で異なる(*Éthique*, II, Prop. XXIX, Schol.)。

<sup>15</sup> たとえば数の概念は十全な認識にかなり接近しているとライプニッツは言う(A VI, 4, 587)。『結合法論』では「一」の概念が実体からの抽象により得られるとされたが(GP IV, 35)、その基盤を仮に認めるなら、数の概念の十全性は示されうる。チルンハウス宛書簡[1678.5 末]でも、概念の分析と記号の分析が対応する結果、記号だけを注視すれば十全な概念が精神にもたらされるとしている(A II, 1, 621 [411])。

<sup>16</sup> 感覚的想像力と記号的想像力の分類も、すでにスピノザに見られる(*Éthique*, II, Prop. XL, Schol. 2)。

<sup>17</sup> 想像力の限界についてほぼ同様の仕方で述べた箇所を以下列挙する。*Discours de métaphysique* [1686], §12; *Elementa rationis* [1686.4-10 (?)], A VI,4,723, tr. fr. in TLM, 153; *Specimen Dynamicum* [1695], GM VI, 241f.; *Tentamen Anagogicum* [c. 1696], GP VII, 271; *De ipse natura* [1698], §7, GP IV, 507f.

<sup>18</sup> ライプニッツは感覚的痕跡から知性の観念への移行を認める因果説(スコラの認識説)を明確に拒否する。Cf. *Quid sit idea?* [1677(?)], A VI,4,1370: 「そもそも、われわれは<観念>という名前で、「われわれの精神の内にある何かあるもの」を理解している。ゆえに脳に刻印された痕跡は観念ではない...」。

<sup>19</sup> ライプニッツの「秩序 *ordo*」の概念とその二義性の問題については、Rauzy[1995]を参照せよ。

<sup>20</sup> Cf. *Leibniz An die Churfürsten Sophie* [1706.2.6], GP VII, 567, 570.

<sup>21</sup> 本論は、数学的認識に関わる高次の想像力のレベルの合理性に注目して分析したものである。近年のライプニッツ研究の傾向にあるように、問題に応じて認識のレベル(理性、想像力、感覚)の強調点を使い分ける、ライプニッツの柔軟な合理性が見てとられなければならない(cf. Dascal[2008])。感覚のレベルに関する合理性については、拙論[2009]でも扱っている。理性のレベルに関する合理性を強調しているものとしては、形而上学的認識や論理的真理を論じる文脈、動物の想像力と人間の理性を対比する文脈、そして、想像力に頼って誤謬を招いたとライプニッツが批判することになるデカルト批判の文脈などが考察されねばならない。本論が扱う想像力のレベルの合理性では、裸の理性による思考が不可能であることをライプニッツは主張している。魂にとって身体、精神にとって物体が不可欠であるように、理性にとって想像力や感覚が不可欠である。数学と想像力の間に関しても、その関連で想像力が強調される場合が多い。本論が扱い得たのは、人間的観点から見た場合の合理性であるが、神的観点を踏まえた、より包括的な想像力の理論が捉えられねばならない。たとえば、「フィラレートとアリストの対話」[1711]で、ライプニッツは無限の観念は神の内には真に存在せず、その理解としては観念と思惟の間にある比例的関係が見て取れば十分としつつも、マルブランシュの「神において見る」に類似した神の思惟と人間の思惟との連関を受け容れ、無限の観念が神からの触発によって与えられるという見方を示し、神を唯一の外的直接的対象とすることでその担保としている(GP VI, 592f.)。

<sup>22</sup> 表現 (représentation) ないし表出 (expression) とは、簡潔には、表現される項 (表象) の諸関係と、表現する項 (表象) の諸関係とのあいだにある規則的・恒常的対応関係のこと (C, 15 ; GP VII, 264 ; GP II, 112)。

<sup>23</sup> 「構造的類比」および発見法としての「真の論理学」については、松田[2003] 第4章を参照せよ。

<sup>24</sup> 匿名の査読委員の先生、Jean-Baptiste Rauzy 教授、並びに、日本ライプニッツ協会での発表時に先生・研究者の方々に有益な質問やコメントを頂きました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

### I. 一次文献・翻訳

※主要著作からの引用並びに表記法については、本号 (『ライプニッツ研究』, 創刊号), 171頁参照。

[CG] *La caractéristique géométrique*, Texte établi, introduit et annoté par J. Echeverría, traduit, annoté et postfacé par Marc Parmentier, Vrin, Paris, 1995.

[QA] *Quadrature arithmétique du cercle, de l'ellipse et de l'hyperbole* [1675-76], Introduction, traduction et notes de Marc Parmentier, Texte latin édité par Eberhard Knobloch, J.Vrin, Paris, 2004.

[TLM] *Recherche générale sur l'analyse des notions et des vérités*, introduction, commentaires et notes par Jean-Baptiste Rauzy, Presses Universitaires de France, Paris, 1998.

[季刊哲学] 季刊『哲学 ars combinatoria』, no.1, 「ライプニッツ 普遍記号学」, 哲学書房, 1988年.

### II. 二次文献

Yvon Belaval [1960]. *Leibniz. Critique de Descartes*, Gallimard, Paris.

Frédéric de Buzon [1991]. « Réduction et irréductibilité du sensible : l'éclisage du sens commun chez Leibniz », *Revue de métaphysique et de morale*, 96, 4, 1991, p. 531-550.

Marcelo Dascal (ed.) [2008]. *Leibniz: What Kind of Rationality?*, Springer.

林宏宏 [2003]. 『ライプニッツ 普遍数学の夢』, 東京大学出版会.

池田真治 [2009]. 「イマージュと抽象—ライプニッツの感覚論と調和の思想—」, *PROSPECTUS*, 12, 2009, p. 1-17.

マーク・ジョンソン [1991]. 『心のなかの身体—想像力へのパラダイム転換』, 菅野盾樹・中村雅之訳, 紀伊國屋書店.

Eberhard Knobloch [2006]. 'Beyond Cartesian limits: Leibniz's passage from algebraic to "transcendental" mathematics', in *Historia Mathematica*, 33, 1, Feb. 2006, p. 113-131.

Nicholas Jolley [1990]. *The Light of the Soul: Theories of Ideas in Leibniz, Malebranche, and Descartes*, Oxford University Press, Oxford.

松田毅[2003]. 『ライプニッツの認識論 懐疑主義との対決』, 創文社.

Robert McRae [1995]. 'The Theory of Knowledge', in Nicholas Jolley(ed.), *The Cambridge Companion to Leibniz*, Cambridge University Press, Cambridge, p. 176-198.

村上勝三 [2004]. 『観念と存在 デカルト研究 1』, 知泉書館.

——— [2009]. 『感覚する人とその物理学 デカルト研究 3』, 知泉書館.

G. H. R. Parkinson [1982]. 'The "Intellectualization of Appearances" : Aspects of Leibniz's Theory of Sensation and Thought', in *Leibniz Critical and Interpretive Essays*, Michael Hooker (ed.), The University of Minnesota Press, Minneapolis, 1982, p. 3-20.

David Rabouin [2005]. « Logique, mathématique et imagination dans la philosophie de Leibniz », *Corpus*, 49, 2005, p. 165-198.

——— [2009]. *Mathesis Universalis : L'idée de « mathématique universelle » d'Aristote à Descartes*, Presses universitaires de France, Paris.

Jean-Baptiste Rauzy [1995]. « *Quid sit natura prius ?* La conception leibnizienne de l'ordre », *Revue de Métaphysique et de Morale*, 100, 1, 1995, p. 31-48.

佐々木力 [2003]. 『デカルトの数学思想』, 東京大学出版会.

Jules Vuillemin [1960]. *La Métaphysique et les Mathématiques de Descartes*, Presses Universitaires de France, Paris.

# L'imagination et l'ordre

## Un essai sur la doctrine leibnizienne de l'imagination

Shinji IKEDA (Aix-en-Provence)

### RÉSUMÉ

Qu'est-ce que l'imagination selon Leibniz ? L'originalité de Leibniz est de généraliser la fonction de l'imagination entendue comme action d'unir. Nous allons suivre cette fonction unificatrice selon ses différentes modalités. En focalisant notre étude sur l'imagination combinatoire, nous considérerons la doctrine leibnizienne de l'imagination selon deux aspects : mathématique et philosophique.

Leibniz a défini la *Mathesis Universalis* comme *logica imaginationis*. Par « imagination », il désigne le domaine des objets mathématiques qui tombent sous l'imagination. Par « logique », il signifie une méthode de raisonnement au sens large, impliquant la synthèse et l'analyse et prenant l'*Ars Combinatoria* comme base des sciences. L'élargissement de l'applicabilité du calcul de la quantité à la qualité correspond à ses recherches mathématiques. C'est la *Mathesis Universalis* qui lui permet d'accepter les fictions de l'imagination provenant des abstractions de l'esprit, en limitant radicalement le rôle de l'imagination à « la pensée symbolique » ou à la *cogitatio caeca* qui lie aveuglement les symboles entre eux.

Notre analyse philosophique de l'imagination chez Leibniz montre que celle-ci ne concerne pas moins la perception que le concept. Ainsi « la logique de l'imagination » n'est pas réalisable par la seule constitution *a priori* des concepts, si les perceptions ne sont pas entièrement réductible à eux. Leibniz hérite du cadre traditionnel, mais il le redéfinit en distinguant divers genres de connaissance. Il apparaît ici une nouvelle ambivalence entre l'ordre de la perception et celui du concept. Il s'agira ici plus particulièrement du caractère polyvalent de l'imagination, entre l'existence et le possible, qui apparaît dans le système leibnizien de la représentation, ainsi que dans celui de l'harmonie. Le premier système permettra une analogie structurelle entre deux systèmes symboliques ; le second donnera une correspondance entre la perception et le concept à travers l'imagination.

En somme, la *Mathesis Universalis*, qui vise à donner une méthode pour ordonner l'imagination, s'accorde parfaitement avec la philosophie de Leibniz qui accorde sa place à l'imagination dans l'ordre de la nature.